

埼玉県蓮田市文化財調査報告書第33集

十三塚古墳

黒浜耕地遺跡

— 第1調査地点 —

1999

埼玉県蓮田市教育委員会



十三塚古墳全景



黒浜耕地遺跡 1号溝出土陶器類

序

蓮田市教育委員会ではこのたび埼玉県蓮田市文化財調査報告書第33集「十三塚古墳、黒浜耕地遺跡」を発刊いたしました。

十三塚古墳は斉藤正雄氏による「山林の伐採・整地」に先立ち、黒浜耕地遺跡は堀部小百合氏による「個人住宅建設」に先立ち緊急発掘調査を実施したもので、十三塚古墳では昭和39年に蓮田町教育委員会（当時）として初めて発掘調査が実施された地点の再調査を実施したものであり、古墳1基、及び縄文時代中期の土坑1基、縄文時代中期から後期の土器等が検出されました。黒浜耕地遺跡は今回の開発により初めて調査が実施されたもので、戦国時代末から近世初頭と思われる溝1条、及びこの溝に流れ込んだと思われる縄文時代前期中葉の貝層の発掘調査を実施し、縄文時代前期の土器等が検出されました。

蓮田市は、市内を元荒川、綾瀬川が貫流し、ローム台地を浸食した「舌状台地」が数多く存在しています。これらの台地上には旧石器時代から歴史時代にかけての遺跡が数多く存在し、埋蔵文化財の宝庫となっております。しかしながら、年々開発が進みこれらの埋蔵文化財は破壊の危機に直面しております。

「古きをたずねて新しきを知る」という言葉がありますが、文化の発展も生活の改善も先人達の生活や足跡を知ることによって図ることが出来ます。昔の人々の生活の知恵や足跡を学び取り、これらの事実を後世に伝えることは私達の急務であると思われます。社会の発展と都市化の影響により貴重な文化財が失われていく昨今ですから、検出された文化財を将来の研究資料として記録し大切に保存していかなければなりません。

今回の報告が学術的な役割を果たすだけでなく、生涯学習資料・郷土史資料として広く活用されることを望むとともに、埋蔵文化財の保護に役立つことを願っております。

最後に発掘調査にご協力いただいた斉藤正雄氏、堀部小百合氏ならびに発掘調査に協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

1999年3月

蓮田市教育委員会
教育長 野崎 好雄

例 言

1. 本書は埼玉県蓮田市大字閨戸字東谷に所在する「十三塚古墳」、ならびに大字黒浜字新井に所在する「黒浜耕地遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 十三塚古墳の発掘調査は、平成9年6月8日付け教社文第92号により、黒浜耕地遺跡は、平成9年10月22日付け教社文第190号により埼玉県教育委員会に届出を行い発掘調査を実施したものである。
3. すべての発掘調査は蓮田市教育委員会が主体者となり、十三塚古墳は寺内正明、田中和之、小宮雪晴が、黒浜耕地遺跡は小宮雪晴が発掘担当者となった。なお、発掘に際して斉藤正雄氏、堀部小百合氏より協力があつた。
4. 出土品の整理、執筆、写真撮影、及び編集は田中・小宮が担当した。なお、石器の実測・トレースは末次雄一郎が担当した。
5. 発掘調査の経費は、国庫補助事業による補助を受けて実施したものである。
6. 報告文中の遺構の規模は確認面からの最大数値であり、深さは確認面、床面からの数値である。
7. 本書の作成に当たり、次の諸氏及び諸機関より、御指導・御助言をいただいた。記して感謝申し上げます。

青木秀雄、奥野麦生、金子直行、島村範之、鈴木敏昭、田中広明、中野達也、西井幸雄、細田勝、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、埼玉葛地区文化財担当者会

8. 調査の組織

○ 主体者

蓮田市教育委員会 教育長 米桝 昭一 (～H10.5.29)

野崎 好雄 (H10.10.9～)

○ 事務局

蓮田市教育委員会教育次長 山本 均、社会教育課長 高野 一朗、文化財保護係

○ 発掘担当者

十三塚古墳 寺内 正明、田中 和之、小宮 雪晴 黒浜耕地遺跡 小宮 雪晴

○ 整理担当者

十三塚古墳 田中 和之、小宮 雪晴 黒浜耕地遺跡 小宮 雪晴

○ 調査・整理参加者

地元住民

目 次

序

例 言

I. 発掘調査に至るまでの経過	1
II. 遺跡の立地と環境	1
III. 十三塚古墳の調査	5
1. 調査経過	5
2. 遺 構	6
3. 出土遺物	11
IV. 黒浜耕地遺跡第1調査地点の調査	17
1. 調査経過	17
2. 遺 構	17
3. 出土遺物	20
V. まとめにかえて	26

挿 図 目 次

第1図	十三塚古墳・黒浜耕地遺跡 と周辺の遺跡	第9図	1号土坑及び調査区出土土器
第2図	十三塚古墳発掘調査地点位置図	第10図	黒浜耕地遺跡発掘調査地点位置図
第3図	前回調査実測図及び今回調査全測図	第11図	黒浜耕地遺跡発掘調査地点全測図
第4図	十三塚古墳実測図	第12図	1号溝実測図及び貝層検出状況
第5図	石室実測図	第13図	1号溝出土土器及び土製品・古銭
第6図	1号土坑実測図	第14図	貝層及び調査区出土土器(1)
第7図	十三塚古墳出土土器	第15図	貝層及び調査区出土土器(2)
第8図	十三塚古墳出土石製品・鉄製品	第16図	貝層及び調査区出土土器(3)
		第17図	調査区出土石器

図 版 目 次

巻 頭	十三塚古墳全景 黒浜耕地遺跡1号溝出土陶器類	図版4	古墳調査風景 1号土坑(北東より)
図版1	十三塚古墳全景(南西より) 石室全景(南西より)	図版5	黒浜耕地遺跡1号溝全景(東より) 1号溝全景(西より)
図版2	前室部近景(南西より) 西側壁近景	図版6	貝層検出状況(東より) 貝層内獣骨検出状況
図版3	側壁裏側鑿痕 石室裏側断面		

I. 発掘調査に至るまでの経過 (第1図)

十三塚古墳は蓮田市大字閭戸字東谷に所在し、昭和39年に蓮田町教育委員会(当時)として初めて発掘調査が実施された遺跡である。しかしながら、現状では森林となり当時の発掘調査地点が正確に確認できない状況であった。このような状況の下、斉藤正雄氏より十三塚古墳として把握されていた市指定史跡地番(1,661.00㎡)において「山林の伐採・抜根及びその整地」に伴う「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」照会があった。これを受けて蓮田市教育委員会では市指定史跡であることから現状保存の道を検討したが、周辺住宅への影響などから開発も止むをえないものと考え、調査の実施された地点ではあるが周溝が全掘されていないことや位置が正確に把握されていないことから、斉藤氏と協議を行い試掘調査を実施して、十三塚古墳の位置を把握すると共に未掘部分及び石室などが保存できる状況にあるかどうか確認することとなった。協議を受けて蓮田市教育委員会では平成9(1997)年5月29日に試掘調査を実施した結果、周溝の4分の3及び石室部分及び土坑1基が確認され、石室部分についても木根が入り込んでおり保存できる状況ではなかった。

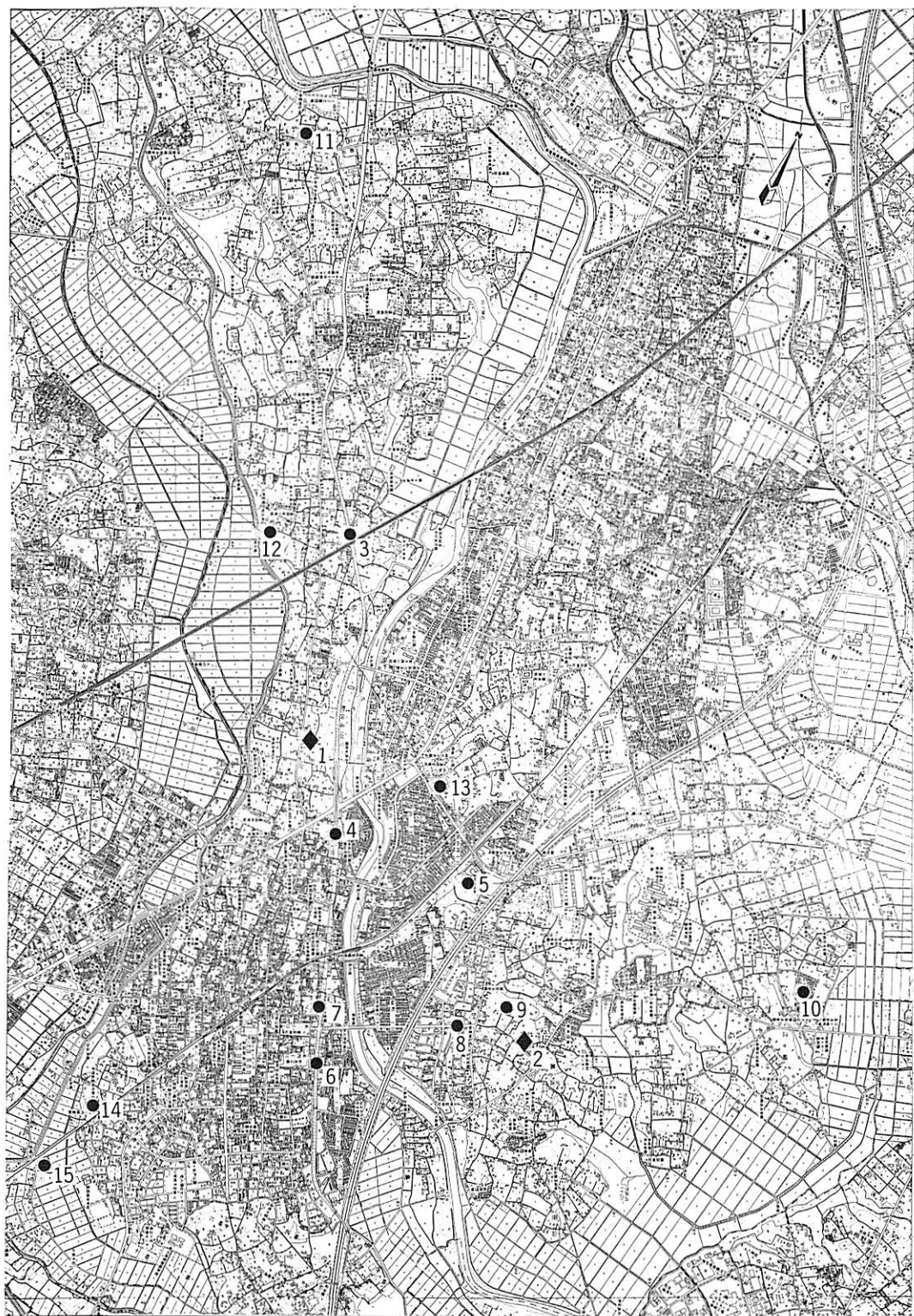
このため、蓮田市教育委員会では平成9(1997)年5月30日～6月17日まで調査対象とした東側部分の400.00㎡の調査を実施したものである。調査の結果、前述のとおり古墳1基、縄文時代中期の土坑1基の調査を実施し、縄文時代中期～後期の土器片が検出されたものである。

黒浜耕地遺跡は蓮田市大字黒浜字新井に所在し、当該地域は市街化調整区域であり今回の調査まで全く試掘調査も行われていない遺跡であったが、分布調査により黒浜貝塚群内の一遺跡として貝塚の存在が確認されていた遺跡であった。このような状況の下、同遺跡包蔵地内に堀部小百合氏より「個人住宅の建設」に伴う「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」照会があった。これを受けて蓮田市教育委員会では堀部氏と協議を行い試掘調査を実施することとなった。これを受けて蓮田市教育委員会では1997年10月22日に試掘調査を実施した結果、溝状の遺構と周辺から流れ込んだと思われる縄文時代前期の貝層が確認された。

このため、蓮田市教育委員会では平成9(1997)年10月23日～10月31日まで190.79㎡の調査を実施したものである。調査の結果、前述のとおり戦国時代末から近世初頭と思われる溝1条及び縄文時代前期と思われる流れ込んだ貝層の調査を実施し、縄文時代前期の土器片が検出されたものである。

II. 遺跡の立地と環境 (第1図)

1の通称「十三塚古墳」(十三塚遺跡)は蓮田市大字閭戸字東谷に所在し、JR宇都宮線蓮田駅より北西へ約2kmの大宮台地東側の蓮田・岩槻支台上の北東部に位置している。遺跡の東側には元荒川が流れる低地が存在し、遺跡の立地する台地の標高は11m～12mを測り、東側低地との比高差は1～2mと緩やかな傾斜を示す。本遺跡は前述のとおり「十三塚古墳」として昭和39年に発掘調査が実施されており、なおかつ市指定史跡として市民に周知している遺跡でもあり、市教育委員会



第1図 十三塚古墳・黒浜耕地遺跡と周辺の遺跡 (S = 1 / 40,000)

で把握している十三塚遺跡としての報告より、十三塚古墳として報告する方が市民にとっても馴染みが深いと判断し本報告名を採用したが、以前から他に数基の塚の存在が語られており本来は十三塚遺跡1号墳（通称「十三塚古墳」）と命名するべきものと捉えている。

周辺は市街化調整区域でもあり開発は少なく遺跡の内容が把握されているものは少ないが、本遺跡北側1.3kmの地点には閨戸足利遺跡（3）が存在し、埼玉県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査が実施され、主に掘立柱建物跡13基、井戸跡13基、土坑39基、溝34条、土塁4基、柱穴列2、性格不明遺構多数が検出されている。遺跡の主体となるものは中世から戦国時代と考えられている館跡が中心であろうが、近世の遺構も蓮田市内で発掘調査された例は少なく注目される。

また、本遺跡南側500mには同じく埼玉県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査、及び蓮田市教育委員会、蓮田市遺跡調査会により数次にわたり発掘調査が実施された荒川附遺跡（4）が存在し、古墳時代後半から奈良時代にかけての住居跡などが多数検出されている。また、古墳時代後期の集落は今回調査の十三塚古墳との関連性も考えられる。

なお、蓮田市内で現在までに古墳などの墓が検出されている遺跡としては、対岸の白岡・黒浜支台の上に位置する椿山遺跡（5）で5世紀末～6世紀初頭と推測されている古墳5基、十三塚古墳と同一台地上で本遺跡の下流2.0kmに位置するささら遺跡（6）において7世紀代の古墳3基が検出されているのみであるが、この他にささら遺跡から小支谷を挟んだ北側台地上に位置する久台遺跡（7）では平成9年度の埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査で、古墳時代初頭前後に位置付けられると推測される方形周溝墓が2基検出されている。また、若干時期が遡るが弥生時代中期の再葬墓が対岸の宿下遺跡（8）で検出されており、これらが比較的新しい時期の古墳・墓などが検出されている市内の遺跡である。

黒浜耕地遺跡（2）は蓮田市大字黒浜字新井に所在し、JR宇都宮線蓮田駅より東へ約2.5kmの大宮台地東側の白岡・黒浜支台東南部に位置している。遺跡はこの黒浜支台上の小支谷が樹枝状に複雑に入り込んだ北側に宿下・宿上遺跡東側まで延びる谷に面した「黒浜貝塚群」の一遺跡である。遺跡の立地する台地の標高は15m～16mを測り、北側低地との比高差は5～6mを測る。

本遺跡西側に隣接して中世～近世初頭と推測される黒浜堀之内遺跡（9）が存在し、その西側には黒浜区画整理事業に伴い発掘調査が進められている宿上・宿下・天神前などの遺跡が存在する。

周辺での館跡等の調査例は数少ないが、前述の宿下遺跡（8）においてほぼ同時期と推測される館跡に関連すると思われる堀が確認されている。この他には若干時期が遡るが、本支台北東端には江ヶ崎城跡（10）が存在し昭和32年に学習院大学により調査が実施されており、鎌倉時代末から室町時代に位置付けられている館跡も存在する。本支台上では黒浜堀之内を含めてこれら3カ所の館跡が確認されているのみであるが、蓮田・岩槻支台側では、北から大字井沼に井沼館跡（11）、大字閨戸に前述の閨戸足利遺跡（3）、閨戸吹上遺跡（12）等の発掘調査で館跡に関する堀跡が確認されており、調査には至っていないが大字城に通称「丸城跡」（13）、大字蓮田字桑原に殿の下遺跡（14）内に館跡が、同字附道に下蓮田堀之内館跡（15）が把握されている館跡である。

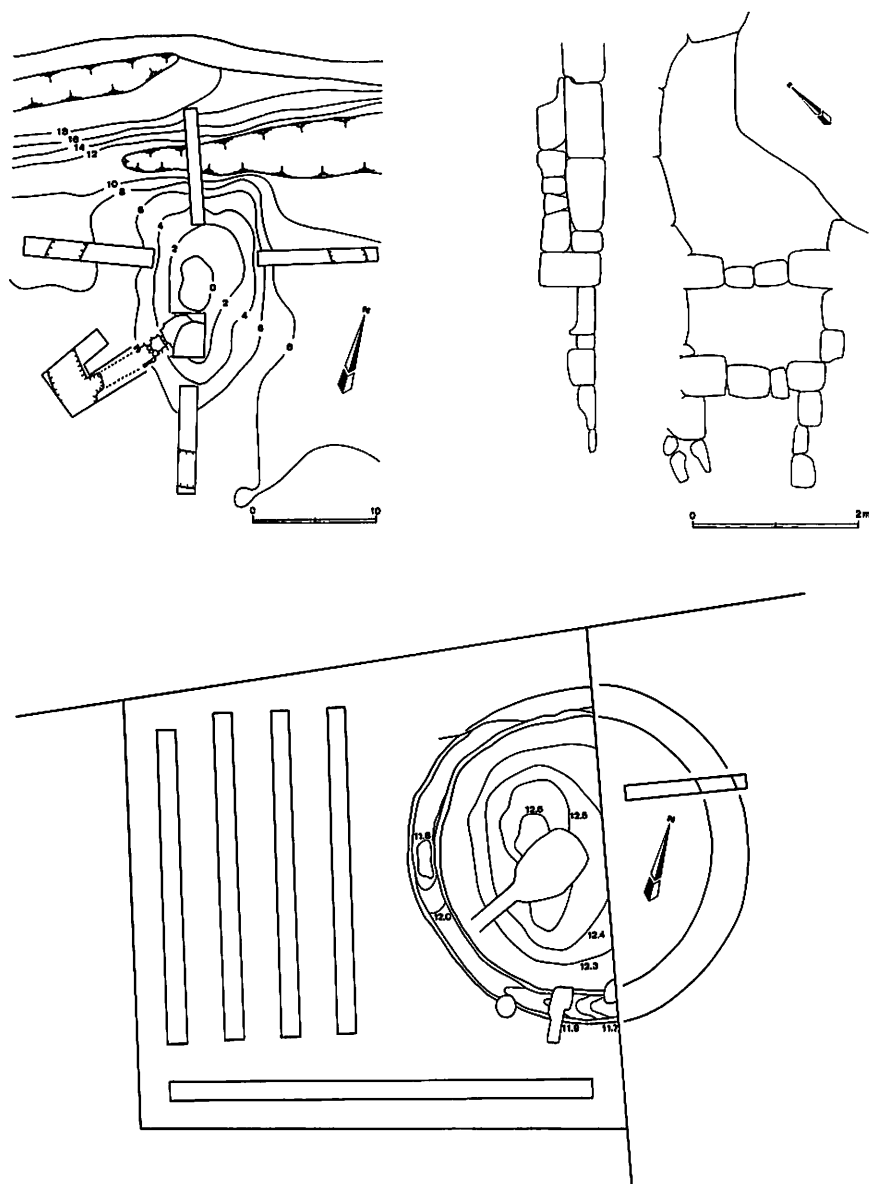


第2図 十三塚古墳発掘調査地点位置図 (S = 1/5,000)

Ⅲ. 十三塚古墳の調査

1. 調査経過 (第2・3図)

十三塚古墳第1調査地点は当初から市指定史跡「十三塚古墳」の指定地番であり、この中に古墳の存在が推測されていたが位置的にはこの地番のどの辺りに存在するのか判然としていなかった。このため、試掘調査は十三塚古墳がどの位置に存在するのか、この他の遺構が存在するかを中心に実施した。



第3図 前回調査実測図及び今回調査全測図 (S = 1 / 600)

試掘調査の結果、開発区域東側に十三塚古墳の4分の3程周溝が確認された以外は、周辺からの古墳及びこれ以外の遺構は確認されなかった。このため、発掘調査は試掘調査によって確認された十三塚古墳石室の再調査及び周溝の調査を中心に平成9年5月30日～6月17日まで実施したものである。

5月30日から古墳石室周辺表土の除去及び周溝全体のプラン確認作業を実施した。確認作業の結果、石室部分には前回調査時点で確認されていた「ムロ」による影響が玄室東側全体に及ぶ他、抜根等により羨道部や他の石室部分にも影響が及んでいることが確認された。また、周溝部分は北側が根切り溝により壊されているほか、南側でも一部に攪乱を受け、前述のとおり縄文時代の土坑が1基確認された。また、この時点で前回確認されていた羨道と周溝の接点に存在する周溝の凸部は確認されなかった。

調査は前回調査の状況が判然としないため、石室部分においても土層観察用のセクションを設定し、周溝についてもセクションを設けて土層の確認作業を行い、石室及び周溝の調査を並行して実施した。周溝は前回調査とほぼ同規模で調査範囲内では巡り、羨道部との接点付近は他と比較して掘り込みが浅いことが確認された。石室部分は前回調査の報告図面との照合を行いながら石室を掘り直し再実測を行ったが、一部に異なる部分があった他はほぼ残存部分では一致した。この時点で完掘状況の写真を撮影し、平面図及び側壁立面図を作成した。

この後、周溝に切られていた土坑の調査及び石室の構築状況確認のため石室裏側にも数カ所にトレンチを設定し調査を実施したが、残存状況が非常に悪く土層の確認は1カ所でかろうじて確認できたものの、掘り方については攪乱と木根により確認できた部分が非常に少なかったが、平面図の作成と側壁裏側で確認された鑿痕部分の写真撮影終了後に可能な部分の石材を抜き取り6月17日に全ての作業を終了した。

調査の結果、7世紀後半と推測される古墳1基及び縄文時代中期と思われる土坑1基が検出され、遺構内及び調査区からは縄文時代中期（加曾利E式期）・後期（堀之内式期）及び古墳時代後半の須恵器・鉄器、土師質の底部破片（1点）及び板碑の小破片（1点）などが出土した。

2. 遺 構

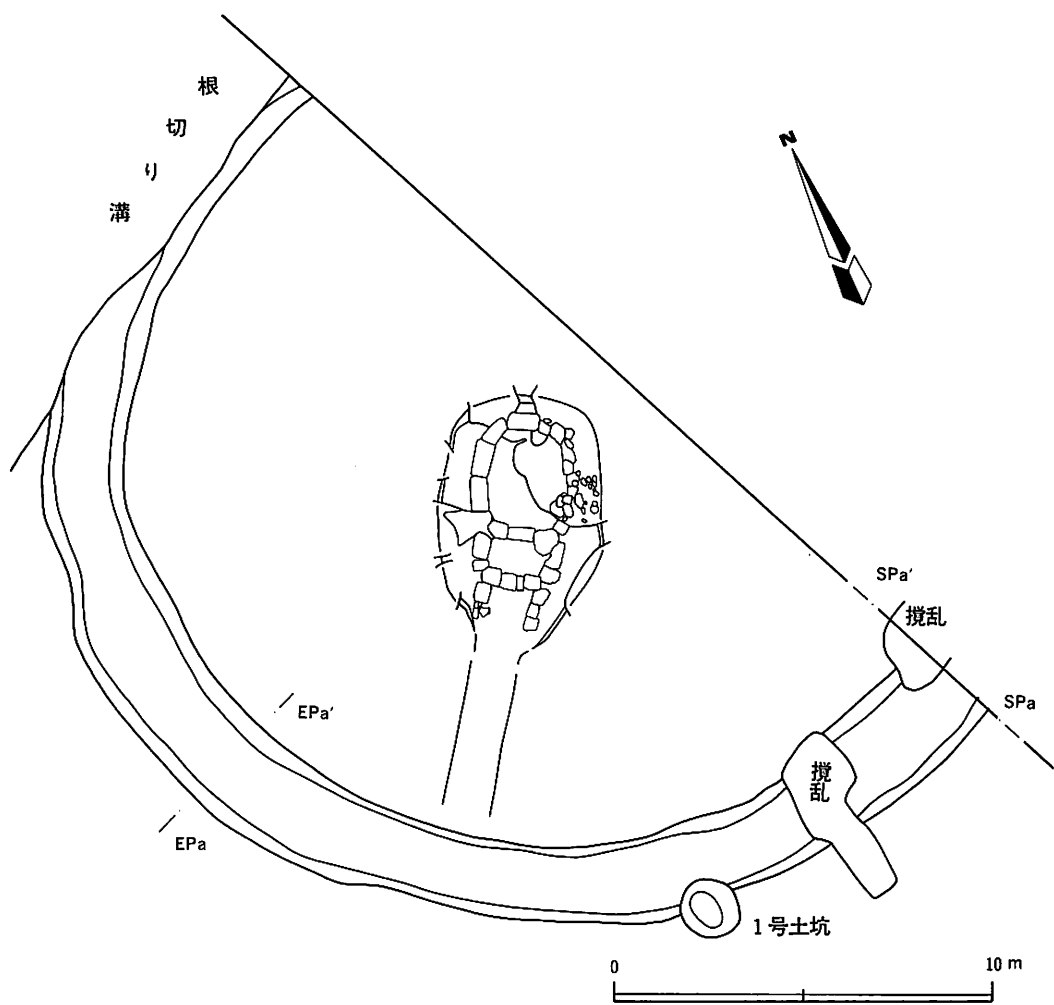
十三塚古墳（第3～5図）

前述のとおり調査地点の東側に位置する地点から検出された。北側の周溝は根切り溝により壊されていたが、僅かに内側の立ち上がり部分のみが確認された。確認された周溝から内周径22m程の円墳であり、周溝の規模は最大幅260cm、深さ50cmを測り、断面形態は比較的浅い皿状を呈する。また、前回調査では羨道部と接する周溝部分に凸部が確認されていたが、今回の調査では確認できなかった。なお、等高線でも確認できるとおり周囲と比較すると羨道と接する付近が若干周溝の掘り込みが浅いことが確認された。

また、周溝内の堆積土層は以下の4層に分層が可能であった。

第1層 黒褐色土層 ローム粒子（径1～5mm）を含む。褐色土混入。しまり、粘性なし。

第2層 黒褐色土層 ローム粒子（径1～5mm）を含む。褐色土少量混入。しまり、粘性なし。

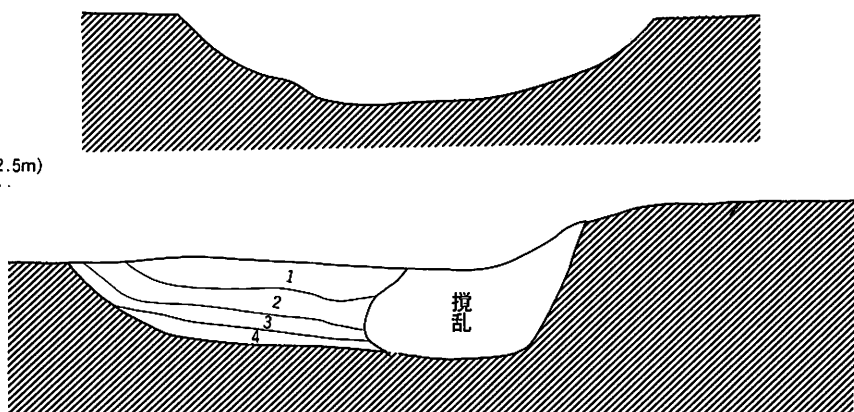


EPa(L=12.5m) —

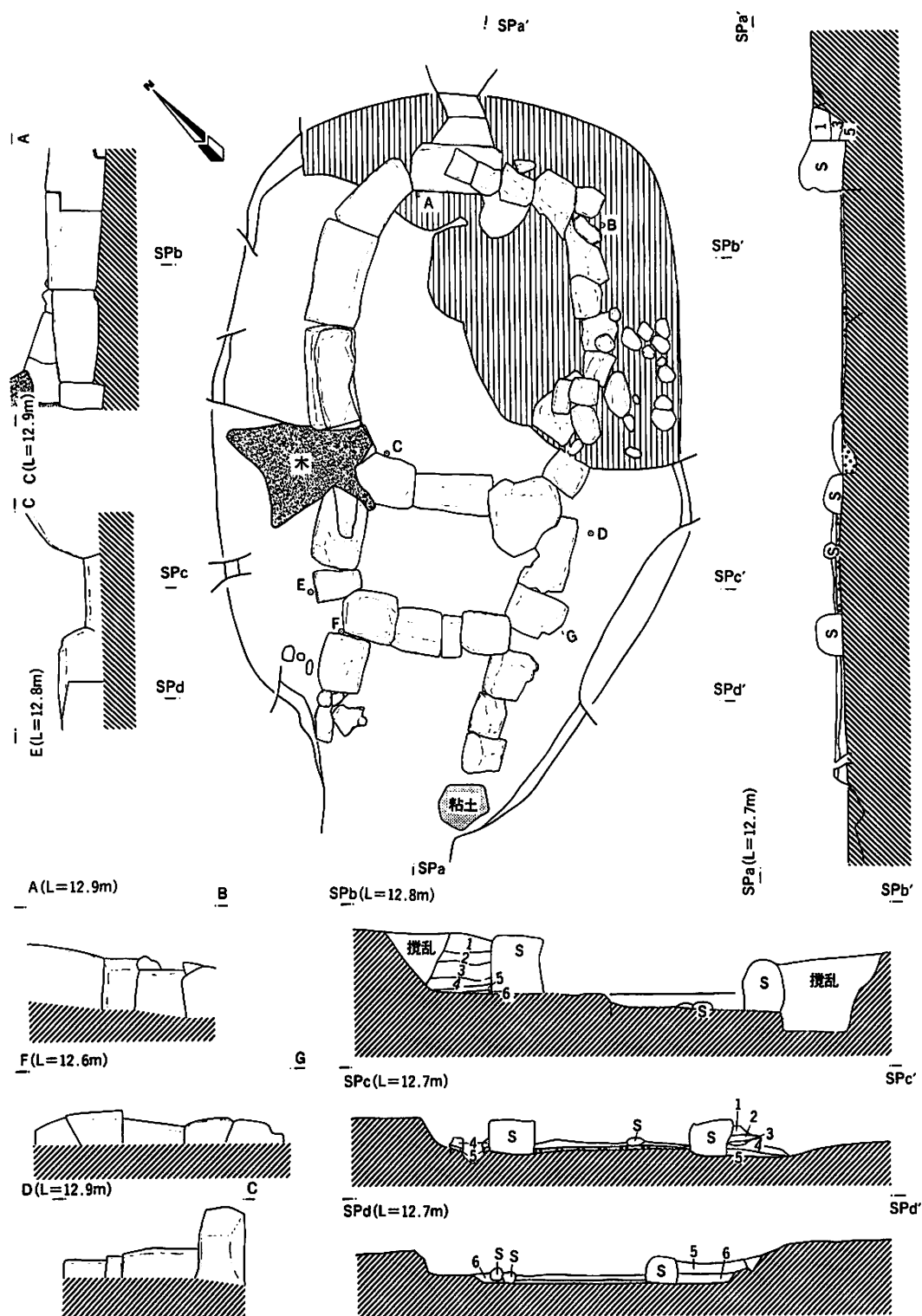
— EPa'

SPa(L=12.5m) —

— SPa'



第4図 十三塚古墳実測図 (S = 1/200、S = 1/40)



第3層 暗褐色土層 ローム粒子（径1～5mm）を含む。黒暗褐色土少量混入。しまり、粘性なし。

第4層 褐色土層 ローム粒子（径1～5mm）を多く含む。ロームブロック（径1～3cm）を少量含む。しまり、粘性なし。

以上の土層観察結果では周溝内に水が蓄えられていた痕跡は全く認められなかった。

石室は推定で中央より若干西側に位置しており、前回調査で確認されているとおり羨道部、前室、奥室（玄室）で構成されており、N-34°-E方向に開口する砂岩質の切石・切り組造りの横穴式石室である。

羨道部は前回調査のとおりにほとんど確認できなかったが、前室部寄りに3列の側壁が前回調査同様に確認されたが、今回調査ではこの前東側に粘土の集中部分が新たに確認されている。この部分での羨道部幅は110cmを測り前門と思われる部分から周溝部までの長さは現状で約6.5mを測る。

前室部は内寸で幅150cm、奥行き90cmを測る。羨道側の前門は前回調査では東側の門柱と思われる切石が縦方向に組まれている状況が確認されていたが、今回調査ではこの石も他と同様の高さの残存状況まで崩落していた。

玄室部は前回調査では表記されていなかったが、北東部の攪乱の下に存在すると思われるムロの影響により地崩れを起こしていたが、1段下の面から側壁の石列が確認された。このため若干位置が崩れていると思われるが推定は可能であり、最大幅210cm、奥行き260cmを測る胴張りの石室で、側壁側面図などでも分かるとおりの切石・切り組造りの構造を有し、内側はアーチ状に組まれている状況を推測することができる。なお、2段目の石は前回調査より残存状況が悪く、奥壁側ではほとんど残存せず西側側壁で僅かに確認されたのみであるが、1段目と2段目の間には粘土が貼られ接着剤として用いられているのが確認された。また、切り組構造は前回調査でも奥壁寄りで1カ所確認されていたが、今回調査ではその奥の奥壁側の石との間にも切り組構造が確認された。なお、今回調査では2段目でこの構造は確認できなかった。前室と玄室を区切る部分には他の石とは異なり、玄門として切石を縦方向に組んでいるものと思われるが、東側の玄門と思われる切石は現状ではこの限りではない。

玄室から羨道にかけての土層は前回調査が行われているため確認できないが、表土などを除去後の層では前回調査後に風化した石室の砂が堆積した層が若干存在し、この下に前室及び玄室の床面一部で径1～2cm程の非常に細かいいわゆる「玉砂利」が敷かれている部分が確認された。

石室の裏込め側の構造は攪乱が多く確認が困難であったが、以下の6層に分層が可能であった。

第1層 灰褐色粘土質土層 ローム粒子（径1～5mm）を含み、砂粒を多く、砂岩（径1～3cm）を少量、粘土ブロックを多量に含む。褐色土混入。しまり良好、粘性あり。

第2層 暗褐色土層 ローム粒子（径1～5mm）を含み、ロームブロック（径1cm）を僅かに含む。粘土粒子を少量、砂粒を僅かに含む。褐色土混入。しまり良好、粘性ややあり。

第3層 褐色土層 ローム粒子（径1～5mm）を多く、ロームブロック（径1～3cm）を少量含む。粘土粒子・砂粒を少量含む。暗褐色土若干混入。しまり良好、粘性ややあり。

第4層 暗褐色土層 ローム粒子（径1～5mm）を含み、ロームブロック（径1cm）、粘土ブロック（3～5cm）を若干含む。粘土粒子・砂粒を少量含む。しまり良好、粘性ややあり。

第5層 灰褐色粘土質土層 ローム粒子（径1～5mm）を僅かに、粘土粒子・粘土ブロックを多量に含む。砂粒を僅かに含む。暗褐色土混入。しまり良好、粘性あり。

第6層 黒褐色土層 ローム粒子（径1～5mm）を若干、粘土粒子・砂粒を若干含む。しまり良好、粘性ややあり。部分的に小礫（1～2cm前後）を多量に含む。

以上の観察結果が得られ、5・6層の存在から1段目の石組みが安定するように板築が丁寧に施されている他、1層は1段目と2段目の繋ぎの部分に存在することから、1段目を設置後にこの部分まで板築し2段目の積み石が崩れないように接地面だけでなく、裏込め側も丁寧に点圧がかけられていたことが推測される。また、これらの部分には石室の製作行程で出たものと思われる残骸が板築に再利用されており、本石室は当該地点で製作されたものと推測される。なお、石室内側面は丁寧に面取りが行われているが、裏側では鑿痕が確認された（写真図版参照）。

前回調査では勾玉2点はムロ内との記載が1点あり、玄室東側の1段下がった床面より検出されたものと思われる。また、直刀2振の出土も前回調査であったが、市史編纂事業のため修復再実測中であり「蓮田市史考古資料編Ⅱ」を参照されたい。また、今回出土の遺物は少ないが、石室内より直刀の鏝1点、これに付着した鉄製品1点、周溝内より須恵器のフラスコ瓶1点の他は土器破片が少量出土している。

本古墳跡の時期は出土土器から7世紀後半に位置付けられると思われる。

1号土坑（第6図）

調査区の南側から検出され、周溝に上面の一部を切られていた。平面形態は長径270cm、短径120cmの略円形状を呈し、確認面からの深さは140cmを測り、壁は比較的垂直に立ちあがる。

覆土は以下の7層に分層が可能であった。

第1層 暗褐色土層 ローム粒子（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1cm）を僅かに含む。しまり、粘性ややあり。

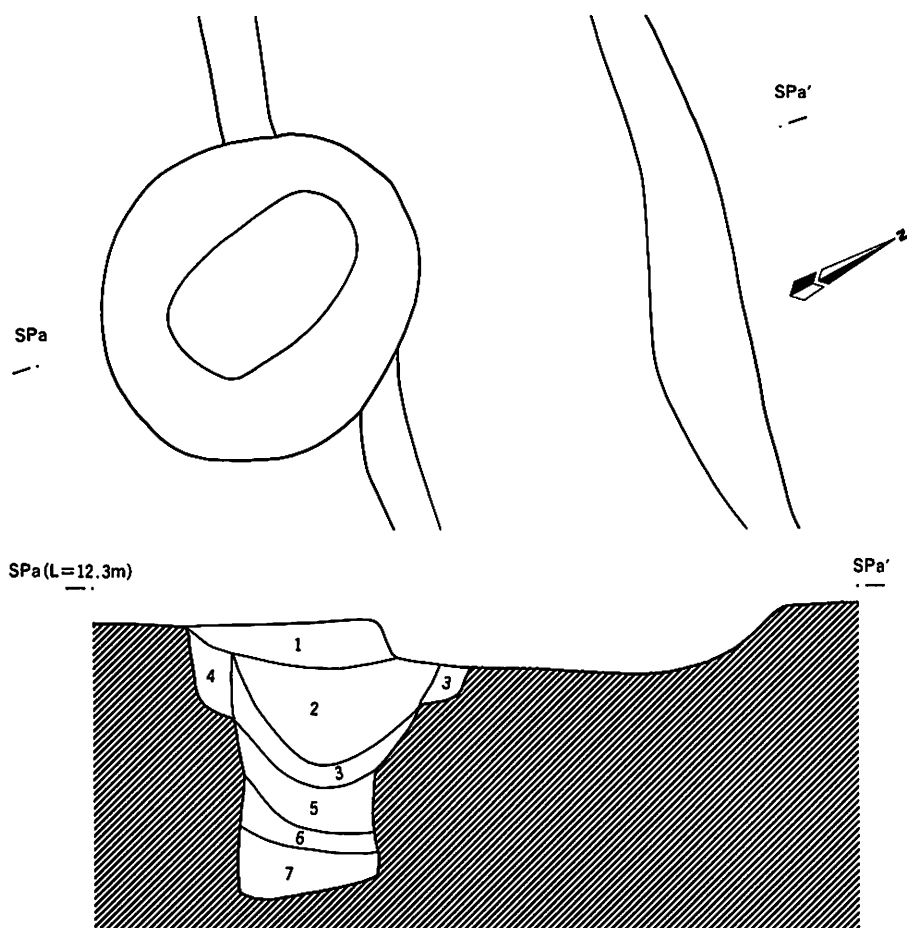
第2層 黒褐色土層 ローム粒子（径1～3mm）を少量、ロームブロック（径1～3cm）を僅かに含む。炭化物粒子を僅かに含む。褐色土斑状に混入。しまり、粘性ややあり。

第3層 褐色土層 ローム粒子（径1～5mm）を多く、ロームブロック（径1～3cm）を少量含む。しまり、粘性ややあり。

第4層 褐色土層 ローム粒子（径1～5mm）を多く、ロームブロック（径1～3cm）を少量含む。しまり、粘性なくポロポロ。

第5層 褐色土層 ローム粒子（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1～3cm）を含む。しまり、粘性ややあり。

第6層 暗黄褐色土層 ローム粒子（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1～3cm）を多く含む。しまり、粘性ややあり。



第6図 1号土坑実測図 (S = 1/40)

第7層 暗褐色土層 ローム粒子(径1～5mm)を多く、ロームブロック(径1～3cm)を含む。
褐色土混入。しまり、粘性ややあり。

本土坑内からの出土遺物は土器片2点及び礫1点と僅かであるが、出土土器及び周辺出土の土器から縄文時代中期～後期と推測される。

3. 出土遺物

前述の通り出土した遺物は少なく、遺構出土土器をあわせても100点に満たない状況であった。古墳については石室内から検出されたものは少なく、周溝内出土遺物が破片数では優っており、主な今回出土遺物も周溝出土のものである。また、土坑及び調査区出土遺物は縄文時代中期末葉から後期にかけての遺物が出土している。

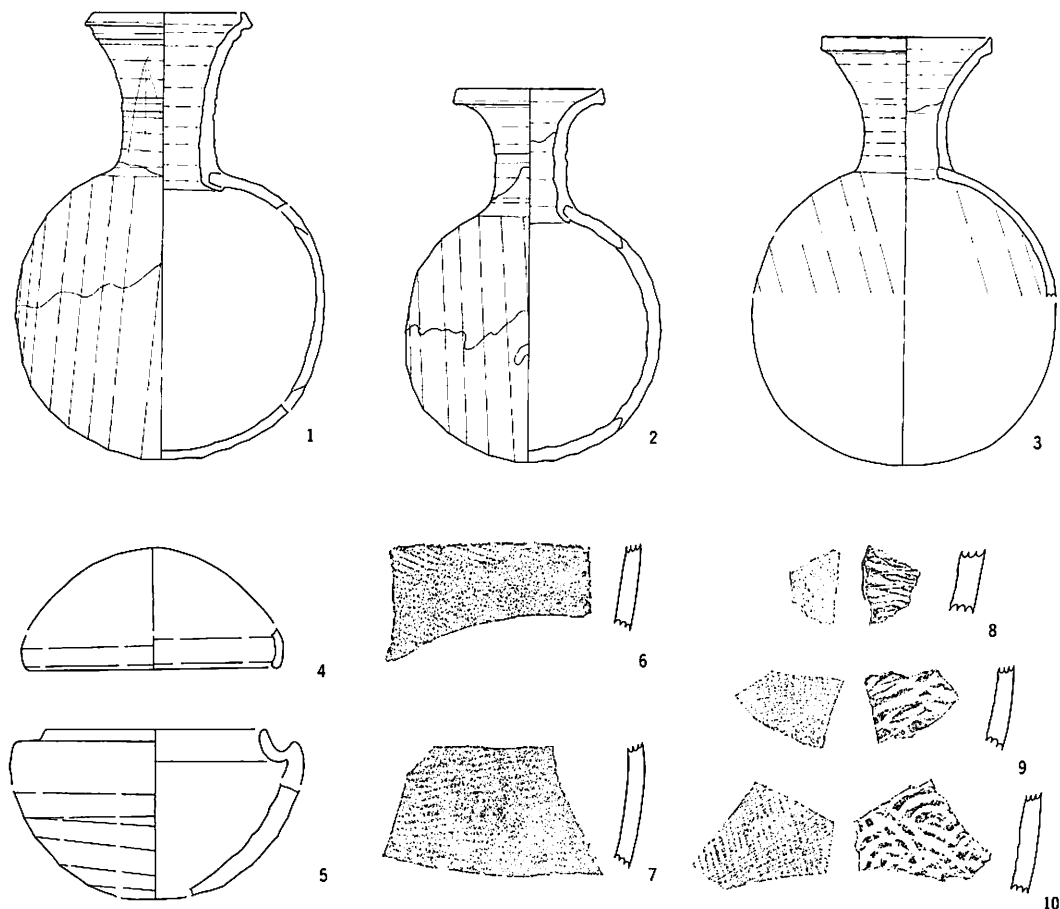
十三塚古墳出土土器(第7図)

今回の調査で出土した遺物は前述のとおり数少なかったが、前回調査の遺物についても併せて報

告し、副葬品などの全容を示したい。なお、前回調査では須恵器のフラスコ瓶2点の他、土師器の坏1点が出土しているが現在所在は不明である。

1・2は前回調査で羨道部より出土したフラスコ瓶である。1は口径7.9cm、頸部最小径4.8cm、胴部最大径16.2cm、器高23.3cmを測る。頸部に2本の浅い沈線が認められ、この上に窯印と思われる「↑」状の細い描写が確認される。自然釉は表面では胴部上半まで、裏面では頸部全体に付着しているのが確認される。なお、今回調査で周溝から検出された須恵器破片がこれに接合している。2は口径7.8cm、頸部最小径3.9cm、胴部最大径13.7cm、器高19.5cmを測る。頸部に2本の浅い沈線が認められる。自然釉は表面では胴部上半まで、裏面では頸部上半部に付着しているのが確認され、1より濃い自然釉が付着している。3は今回調査で周溝より出土したフラスコ瓶である。口径9.0cm、頸部最小径4.3cm、胴部最大径16.1cm、残存高13.5cmを測り、他2点のような頸部の沈線は認められない。自然釉は表面では頸部全体、裏面では頸部上半部に付着しているのが確認された。

4・5は小破片であるが推定復元したものである。4は蓋坏、5はその身となる坏と思われる。4は推定口径10.0cmを測るが、器高等は不明である。5も口縁部が欠損しており口径、器高等は不



第7図 十三塚古墳出土土器 (1～3 S=1/4、4～10 S=1/3)

明である。なお、底部は篋削りにより非常に薄く器厚が整形されているのが確認された。

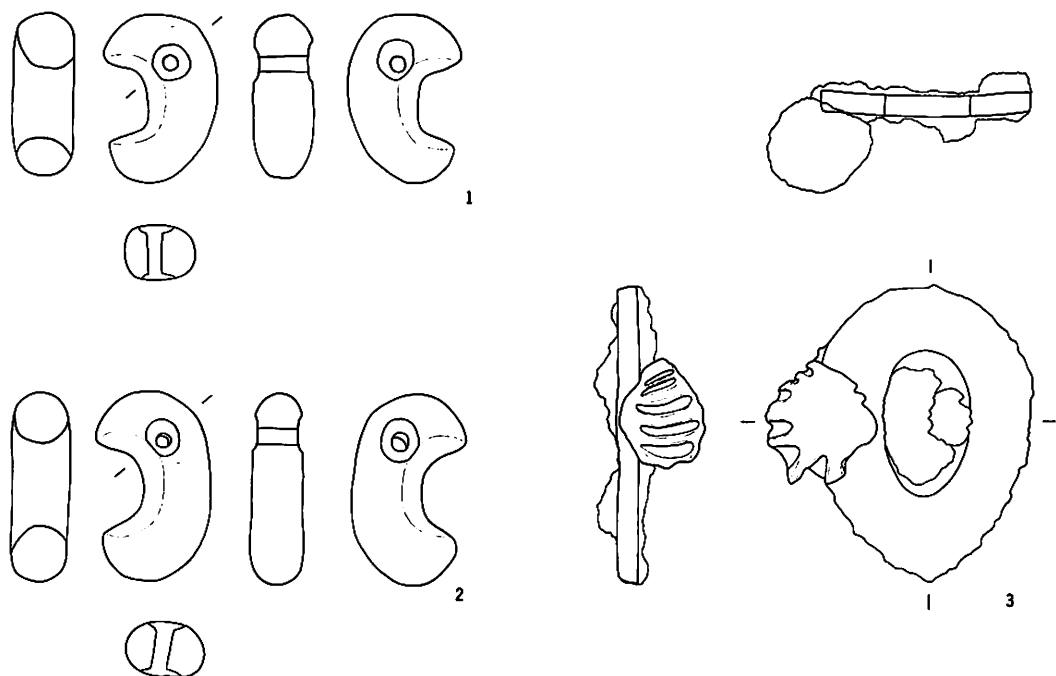
6～10は須恵器破片であり器形復元は不可能であった。いずれも甕の破片と思われる、いずれも外面には平行叩きが施されており、8～10には裏面に青海波紋が認められる。

十三塚古墳出土石製品・鉄製品（第8図）

今回調査で出土した上記製品は鉄製品2点のみであるが、前回調査時に直刀2点、鉄鏃多数（点数不明）が出土している。また、前回調査において勾玉2点が出土している。前述のとおり直刀については「蓮田市史考古資料編Ⅱ」を参照されたい。

1・2は前回調査で出土した勾玉である。1は「ムロ」出土との記載がある。最大長3.3cm、最大幅2.2cm、厚さ1.2cmを測る。径3mmの円孔が穿たれ、円孔の表裏面には径8mm、深さ1mm前後の凹部が認められ、重量10.7gを量る。2は「北東隅棺床」出土との記載がある。最大長3.7cm、最大幅2.2cm、厚さ1.2cmを測る。径3mmの円孔が穿たれ、円孔の表裏面には径8mm、深さ1mm前後の凹部が認められ、重量11.7gを量る。石材は判然としないがいずれも全体的に白色の粘板岩質の石材と思われる。両者の記載から北東寄り玄室内床面から出土したものと思われる。

3は今回調査で玄室内より出土した鉄製の鏢である。最大長5.8cm、最大幅4.2cm、厚さ4mmを測り、孔は最大長2.9cm、最大幅1.7cmに穿たれている。この鏢に径2.2cm、厚さ1.8cmの鉄製品が付着しているが、これ1点のみ検出されたものである。エックス線写真などを実施していないため空洞かどうか判然としない。



第8図 十三塚古墳出土石製品・鉄製品（S = 2 / 3）

1号土坑出土土器（第9図1・2）

本土坑からは図示した2点の土器片の他には破碎した礫が1点出土したのみである。1・2はいずれも胴部破片であり、1は単節縄文LR、2は単節縄文RLが施されている。

調査区出土土器（第9図3～28）

調査区から出土した土器は縄文時代中期末葉の加曾利EIV式及び後期初頭称名寺式土器破片、前半堀之内式土器破片及び時期不明の土師質の底部破片である。

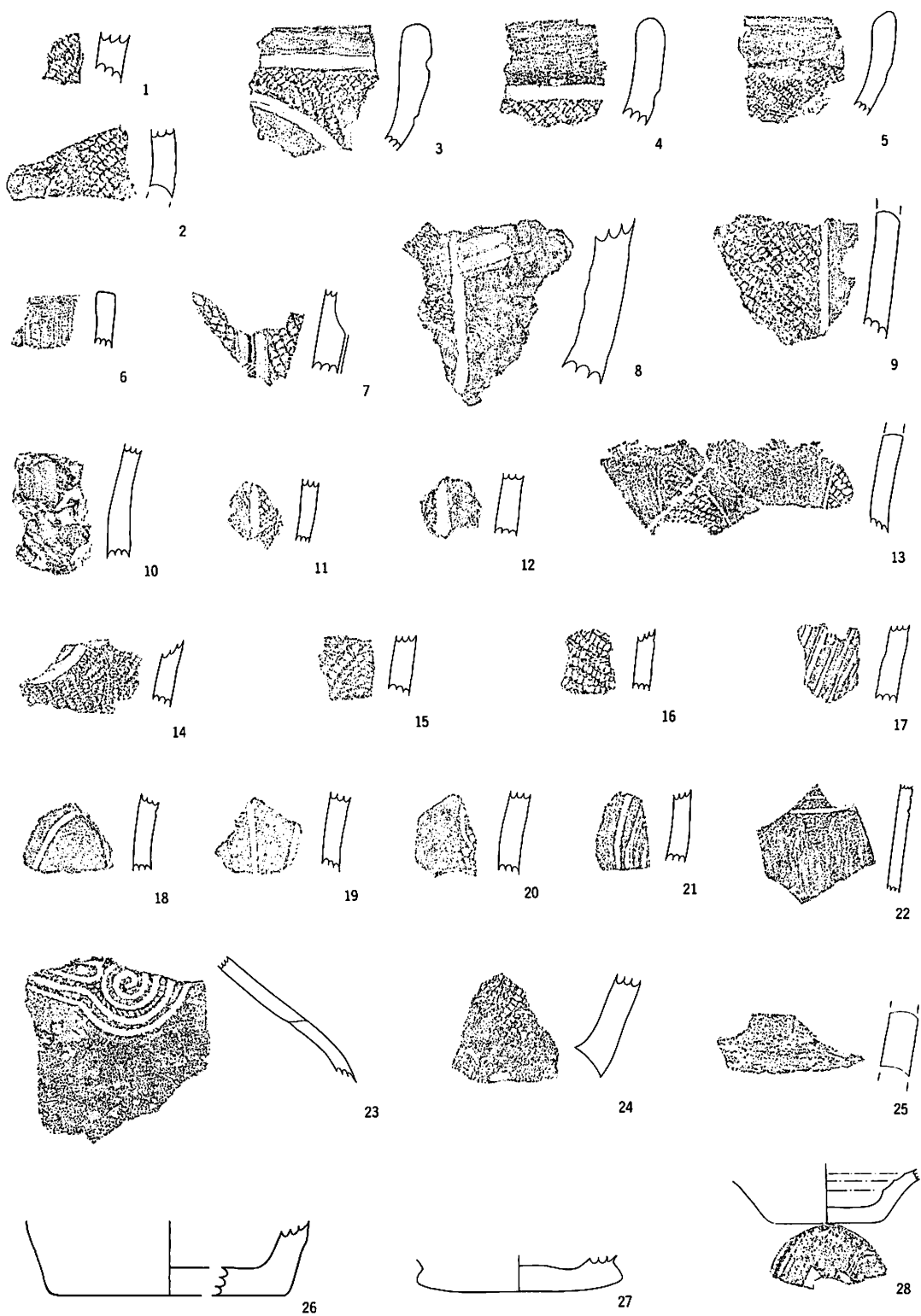
3～17は中期末葉と思われるものであり、3～6は口縁部破片である。3・4は1条の沈線により口縁部に無文帯が造り出され、3は残存破片内では1条の沈線により口縁部にモチーフが施されている。地文にはいずれも単節縄文RLが施されている。5は微隆起線により口縁部に無文帯が造り出され、地文には単節縄文RLが施文されている。3～5はキャリパー状を呈すると思われる。6は櫛歯状工具による条線が縦位に施されている。

7～17は胴部破片である。7は隆帯が垂下して貼付されており、両端は丁寧に接着されている。地文には単節縄文RLが施文されている。8～14は沈線により胴部にモチーフが施されるものであり、8～12は2条一対の沈線が垂下されるものと思われ、沈線間は磨消されている。地文には8が単節縄文RL、13・14はU状もしくは∩状に沈線が施され、13は∩状モチーフ間のみ地文が残され他は磨消されており、地文には単節縄文LRが施文されている。14も地文には単節縄文LRが施文されている。

15・16は地文のみが施されているもので15は単節縄文LRが、16は単節縄文RLが施文されている。17は条線が縦位に施文されるのみである。

18～21は後期初頭称名寺式土器の破片である。いずれも沈線によりモチーフが描かれており、地文は認められない。22・23は後期前半堀之内式土器破片である。22は口縁部付近の破片と思われ、口縁部に沿って数条沈線が施されるものと思われる。地文には単節縄文LRが施文されている。23は注口土器もしくは浅鉢の破片と思われ、数条の沈線により渦巻き状モチーフが描かれており、一部の沈線間に刺突が施されている。地文は認められない。

24～28は底部もしくは底部付近の破片である。24・25は底部付近の破片であり、24は地文に単節縄文RLが施されている。25は地文は認められず、横位の整形痕のみが認められる。26は推定底径11.0cmを測り、地文は認められず、横位の整形痕のみが認められる。27は推定底径9.8cmを測り、底部直上から「く」字状に開くと思われる。地文は認められない。28は土師質の底部破片である。推定底径5.2cmを測り、内面に稜が数条認められ、底部は篋削りが施されている。帰属時期は判然としない。



第9図 1号土坑及び調査区出土土器 (S = 1 / 3)

V. まとめにかえて

十三塚古墳（十三塚遺跡）の調査では、今回の面的な調査により、N-34°-E方向に開口する砂岩質の切石・切り組造りの横穴式石室であり、各構造の規模は羨道部幅1.1m、長さ6.5m、前室幅1.5m、奥行き0.9m、玄室幅2.1m、奥行き2.6mを測り、内周径22m程の円墳であることが確認された。また、今回新たに検出された遺物から全てが同一時期の遺物とは考えられないが、前回調査出土遺物も含めて須恵器のフラスコ瓶3点、土師器の坏1点、直刀2振、鉄鏃の他、鐙1点、鐙に付着していた鉄製品1点、勾玉2点などが検出された。

十三塚古墳が存在する十三塚遺跡は、分布調査により古墳時代後半の土師器などが採集されている遺跡であったが、今回は古墳跡1基が確認されたのみであり該期の住居跡などは確認されなかったため、本遺跡内に該期の集落存在の有無は今後の調査に期待したいと思う。

また、今回の調査では古墳跡1基が確認されたのみであるが、当初から数基の塚状の墳丘が存在していたとの聞き取りがあり、現状ではこれらは確認できないものの、今までの通称のとおり「十三塚古墳群」として古墳の呼称は命名しておくこととする。

現在までに古墳などが検出されている遺跡は僅かではあるが、これらに明確に対比される集落遺跡は現在までに確認されているものは存在しない。椿山遺跡の古墳群は6世紀前後に位置付けられているが、該期の集落は同一台地上では確認されておらず、僅かに対岸の荒川附遺跡で確認されているのみである。また、ささら遺跡の古墳群は十三塚古墳とほぼ同一時期に位置付けられていると思われるが、周辺の調査では古墳時代初頭の集落はささら遺跡、南の馬込八番遺跡で比較的大きな集落が営まれているが、該期の集落は周辺では少なく小支谷を挟んだ南側に位置する帆立山遺跡において6世紀以降の遺構が僅かながら検出されているのみである。

しかしながら、現状での傾向が僅かながら認められ、前述の帆立山遺跡（集落？）→ささら遺跡（墓域？）の他に古墳時代初頭ではささら遺跡（集落？）→久台遺跡（墓域？）という現象をうかがい知れる。この傾向から推測すると荒川附遺跡（集落？）→十三塚古墳群（墓域？）という可能性が見いだせるが、あくまでも現状での傾向であり本古墳群を含めた個々の古墳群などに関連する集落の特定、及びこれらの市内に存在する古墳群と十三塚古墳との関連性等課題も多く残されているが、今後の調査の成果に期待したい。

縄文時代に関しても1基の土坑が確認されたが、出土した該期の遺物のほとんどは古墳から出土したものであり、遺物の出土総量も極めて少ないものであった。しかしながら、調査例の少ない大字関戸地区の縄文時代相の一端でも検出された意義は深く、本地域の該期の実態について今後さらに調査例が増加することに期待したい。

黒浜耕地遺跡で検出された遺構は前述のとおり溝1条と少なく、遺構に伴うと思われる出土遺物も少なく時期・性格とも判然としないが、近世初頭までには位置付けられるものと推測される。本調査地点北西150mには第10図でも分かるとおり中世～近世初頭と推測され土累も残る黒浜堀之内館跡が隣接する。この黒浜堀之内遺跡は非常に明瞭な長形状に台地が突出しており東西及び北側

が自然地形を利用した館跡として捉えて差し支えないものと思われる。このことから推測すると今回調査で検出された溝は南東端に位置する館跡関連遺構の可能性も考えられるが、僅かな部分の調査であり今後の調査により溝の続きがどのように黒浜堀之内遺跡と関連するのか検討したい。

流れ込んでいた貝層からは主体的には縄文時代前期中葉の黒浜式土器が主体を占めており、ほぼ該期のものと推測されよう。しかしながら今回の調査成果のみでは傾向が把握できる状況ではなかった。分布調査により本遺跡内に貝塚が存在することは確認されていたが、前述のとおり本地域には小支谷が複雑に入り込み集落や貝塚がどのような広がりを見せるか判然としない。唯一確認されていた調査地点南側50mに存在する貝塚を伴う集落はその南に存在する谷に面した集落と想定していたが、今回の調査成果により北側への広がりも想定されることとなり、今後の検出例を待たなければならない問題となった。

いずれにせよ、今回の調査により本遺跡内に所在する貝塚の時期も縄文時代前期中葉黒浜式期に比定されることは確認され、前後の存続時期がどの程度続くか今後の調査に期待したい。

《引用参考文献》

- 1981 「的場・八番・荒川附遺跡」 蓮田市文化財調査報告書第2集
- 1982 「新編埼玉県史」 資料編2—原始・古代—
- 1983 「ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集
「江ヶ崎貝塚、御殿場遺跡、荒川附遺跡」 蓮田市文化財調査報告書第5集
- 1984 「閨戸足利」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第40集
「江ヶ崎貝塚、荒川附遺跡」 蓮田市文化財調査報告書第6集
- 1986 「ささら遺跡」 蓮田市遺跡調査会調査報告書第1集
- 1987 「ささら遺跡」 埼玉県蓮田市文化財調査報告書第9集
- 1988 「椿山遺跡」 埼玉県蓮田市文化財調査報告書第12集
「荒川附遺跡」 埼玉県蓮田市遺跡調査会調査報告書第3集
- 1989 「椿山遺跡」 埼玉県蓮田市文化財調査報告書第13集
「荒川附遺跡、宿下遺跡」 埼玉県蓮田市文化財調査報告書第14集
「荒川附遺跡」 埼玉県蓮田市遺跡調査会調査報告書第4集
- 1991 「寺前平方遺跡」 埼玉県蓮田市遺跡調査会調査報告書第5集
「荒川附遺跡」 埼玉県蓮田市遺跡調査会調査報告書第7集
「閨戸吹上遺跡」 埼玉県蓮田市遺跡調査会調査報告書第8集
- 1992 「荒川附遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第112集
「帆立山遺跡」 埼玉県蓮田市文化財調査報告書第18集
「荒川附遺跡」 埼玉県蓮田市遺跡調査会調査報告書第17集
- 1993 「井沼館跡」 埼玉県蓮田市文化財調査報告書第20集
「閨戸吹上遺跡—第2調査地点—」 埼玉県蓮田市遺跡調査会調査報告書第21集
- 1994 「ささら遺跡」 埼玉県蓮田市文化財調査報告書第22集
- 1995 「ささら遺跡」 埼玉県蓮田市遺跡調査会調査報告書第23集

報告書抄録

ふりがな	じゅうさんづかこふん		くろはまこうちいせき				
書名	十三塚古墳		黒浜耕地遺跡				
副書名	第1調査地点						
巻次							
シリーズ名	埼玉県蓮田市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第33集						
著者氏名	田中和之、小宮雪晴						
編集機関	埼玉県蓮田市教育委員会						
所在地	埼玉県蓮田市大字黒浜2799番地1					Tel.048 (768) 3111	
発行年月日	西暦1999（平成11）年3月29日						
所収遺跡	所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
じゅうさんづかいせき 十三塚遺跡	さいたまけんはすだし 埼玉県蓮田市 おおあぎうらんど 大字閼戸 あぎうら 字東谷	112381-018	35° 59′ 30″	139° 39′ 00″	19970530 ～ 19970617	400.00	山林の伐 採・抜根
くろはまこうちいせき 黒浜耕地遺跡	さいたまけんはすだし 埼玉県蓮田市 おおあぎくろはま 大字黒浜 あぎあら 字新井	112381-038	35° 59′ 00″	139° 40′ 30″	19971023 ～ 19971031	190.79	個人住宅 の建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
十三塚遺跡	集落跡 古墳	縄文時代中期	土坑 1基	縄文時代中期の土器		特になし	
		古墳時代	古墳 1基	須恵器、鉄製品		特になし	
黒浜耕地遺跡	集落跡 貝塚	戦国末～近世	溝 1条	縄文時代前期の土器		流れ込みではあるが 縄文時代前期の貝層	



十三塚古墳全景（南西より）



石室全景（南西より）



前室部近景（南西より）



西側壁近景



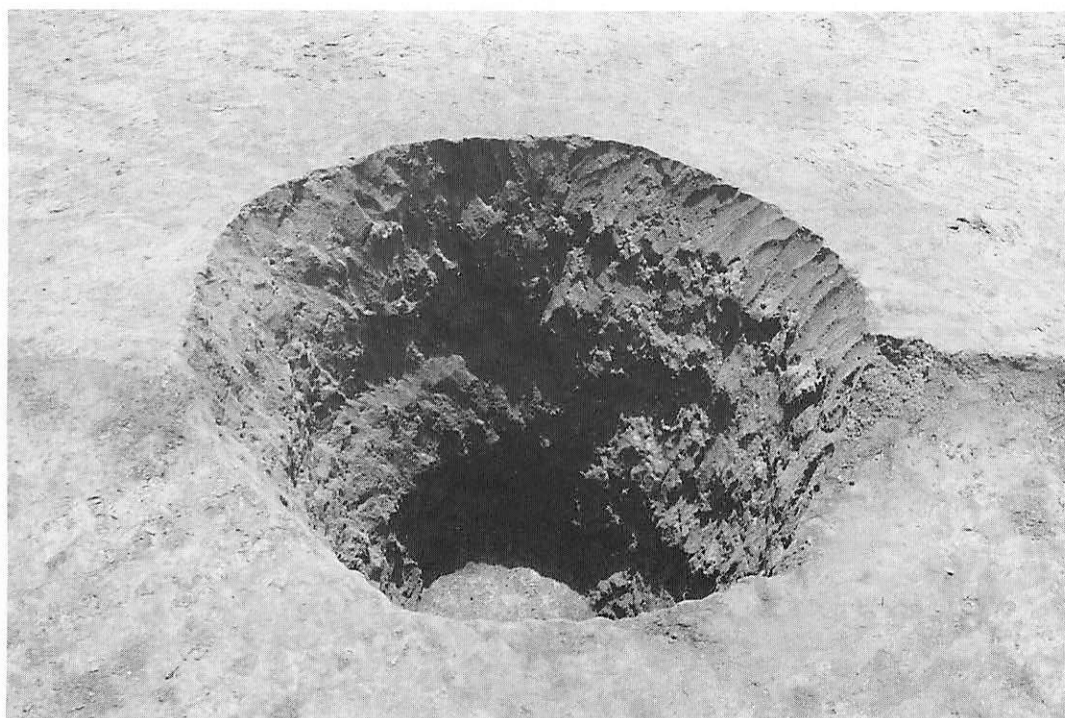
側壁裏側鑿痕



石室裏側断面



古墳調査風景



1号土坑（北東より）

平成11年3月20日 印刷

平成11年3月29日 発行

埼玉県蓮田市文化財調査報告書 第33集

十三塚古墳

黒浜耕地遺跡

— 第1調査地点 —

発行 蓮田市教育委員会
埼玉県蓮田市黒浜2799-1

印刷 有限会社 閑山房
大宮市宮原町4-7-11